

日本文学における天皇像

——『古事記』『日本書紀』『万葉集』『古今和歌集』

『竹取物語』『源氏物語』『大鏡』『平家物語』

夜 久 正 雄

(一) 『古事記』

『古事記』は西紀七一二年の成立であるが、それは太安万侶の記録事業と見られる。その原型は、聖徳太子が蘇我馬子とともにお作りになつた天皇記国記であると思はれる。さうすれば西紀六二〇年となる。それから七一二年までの間に完成したのが、今日の『古事記』と見てよいであらう。

建国の叙事詩とすれば比較的に新しい作品であるが、日本最初の散文文学の作品である。『古事記』を何と比較したらよいかは、簡単にはゆかないが、『旧約聖書』や『イリアス』『オデュッセイヤ』や、中国では何と比較すべきだろうか、『春秋』『史記』と比べられようか、——かうした各国の古代叙事詩ないし古代歴史と比較してみると、それらはみな西暦紀元前の作品であるのに対して、『古事記』は七世紀以後といふので、「比較的に新しい」と書いたのである。漢訳大乘仏典に比べても新しいといふことになる。それはともかく、日本最初の神話・伝説・歴史は『古事

夜 久 正 雄

『古事記』であつて、ここにわれらの祖先は日本国家の由来を表現したのである。

『古事記』の主要人物は、古代叙事詩の性質から当然古代の建国の英雄であるが、それは具体的には歴代天皇ならびに天皇をお助けして民族の發展に尽した神々、皇族、族長、お妃たちであつた。表題の「日本文学における天皇像」は『古事記』からはじめるのが適當であらう。

では『古事記』は天皇をどう描いたか。

初代神武天皇は神倭伊波礼毘古命（カム・ヤマト・イハレ・ビコノミコト）で、日向の高千穂宮から御兄君の五瀬命（イツセノミコト）と御一緒に、東へ遷られ、——九州から瀬戸内海を通つて大和に入られたのである。

「神倭伊波礼毘古命、その同母兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐して議りて云りたまひけらく、『何地に坐さば、平けく天の下の政を聞きしめさむ。なほ東に行かむ』とのりたまひて、すなはち日向より発たして筑紫に幸行でましき。」（『古事記』中巻）

と、まづはじめに書かれてゐる。

この「平けく天の下の政を聞きしめさむ」とのお言葉が、天皇統治の根本精神を示すのである。

「まつりごと」といふ言葉は、政治の意味でもあり「祭祀」の意味でもある。皇室祖先の霊をお祭りすること、国民の心をすべをさめられることは、日本天皇のお仕事の中心である、といふことを、この「まつりごと」といふ日本語が示すのである。「平けく天の下の政を聞きしめさむ」は、日本天皇の伝統精神であつて、歴代御製にうたひつがれ、今上天皇昭和御治世最初の歌会始のお歌に次の通りにある。

山色新（昭和三年）

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかにかあるらむ

『日本書紀』には、次のやうに書いてある。説明すれば、かういふことになるといふ意味であらう。

「昔わが天神、高皇産靈尊・大日靈尊、此の豊葦原瑞穗国を挙げて、わが天祖彦火瓊杵尊に授けたまへり。是に彦火瓊杵尊、天閼を開き、雲路を披け、仙躰駈ひて戻至ります。是の時に、運、鴻荒に属ひ、時、草昧に鍾れり。故、蒙くして正を養ひて、此の西の偏に治す。皇祖皇考、乃神乃聖にして、慶を積み暉を重ねて、多に年所を歴たり。天祖の降跡りましてより以速、今に一百七十九万二千四百七十余歳。而るを、遠遜なる地、猶未だ王沢に霑はず。遂に邑に君有り、村に長有りて、各自疆を分ちて、用て相凌ぎ躒はしむ。

抑又、塩土老翁に聞きき。曰ひしく『東に美き地有り。青山四周れり。その中に亦天磐船に乗りて飛び降る者有り』といひき。余謂ふに、彼の地は、必ず以て大業を恢弘べて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降るといふ者は、是鏡速日と謂ふか。何ぞ就きて都つくらざらむ」（岩波・日本古典文学大系『日本書紀』に拠る）

さて、大和の国に入られた神武天皇は、苦戦の末に、土着のナガスネヒコその他の土豪の反抗を征服なさつて橿原の宮に皇都を置いて日本の国を統治された。遠征軍の大將であり、政治的君主であり、神意の継承者であられた。祭祀と政治（文武）の統率者であられた。

ここまでは、古代帝国の英雄帝王とあまり変りはないが、天皇が同時に歌謡の作者であつたといふことは、天皇の

本質にかかはることである。さきに述べた天皇統治の根本精神と深く関はることもある。『古事記』（及び『日本書紀』）は、神武天皇を数々の歌謡の作者として語り伝へたのである。しかもその歌謡が、部下の将卒に対する同胞的な感情を詠まれたものであることを見ずごしてはならない。また、お妃のイスケヨリヒメに対する恋愛の歌の作者であることも重要なことである。つまり、天皇は国民と離れて国民にただ厳然と臨み権力をもつてこれを支配するといふやうな専制君主としてでなく、国民とともにあつて国民と心を通はされる民族的指導的人格として描かれたのである。「二君万民」といふ、「天皇」のもとに国民は平等であるが、また「神と歌」との前に天皇も国民も平等である、といふことが言へるのかも知れない。したがつて、神意にさからつた仲哀天皇は悲劇的な最期をもとげられるのである。

このことは『古事記』『日本書紀』に神武天皇の御歌として伝へられてゐる歌謡が、歴史年代に想定される初代天皇の創作歌謡であるかどうかといふことはあまり関係がない。日本語の最初の建国の叙事文学に登場する初代天皇が、政治的軍事的英雄であり祭祀の主事者であると同時に、歌謡の作者であるといふことが重要なのである。『古事記』の上巻は、神々の物語つまり神話で、中巻から人代に入り、神武天皇からはじまる。そして、崇神・垂仁天皇をへて倭建命（ヤマトタケルノミコト）の東西遠征、神功皇后三韓征討に終る。大和から本州、九州、三韓へと国土の版図の拡大があり、それとともに宗教的勢力圏の拡大があり、地方神の吸収が営まれる。政治的軍事的宗教的文化的拡大事業が『古事記』中巻のテーマである。したがつてこの時期の天皇は「まつろはぬ人ども」を平定する政治的軍事的統率者であるとともに、宗教的權威の把持者として描かれてゐる。と同時に、倭建命に見られるやうにすぐれた歌謡の作者であること、神武天皇と変りがない。

下巻は仁徳天皇から推古天皇までであるが叙事的の記事は継体天皇までである。仁徳天皇は『古事記』に「聖帝」

(ひじりのみかど)と称へられたが、その理由は「百姓ひなみたくら采とえて役使えだちに苦しまざりき」とあるやうに、仁愛の内政充実である。内政の中には諸氏族の族長の娘たちとの恋愛問題がある。数々の恋愛の歌の贈答が仁徳天皇記をかざるのは、天皇と諸氏族との血縁関係の濃くなると共に、その間の精神の交流をも語るものである。以下、武烈天皇に至つて仁徳天皇の御血統が絶えるまで、皇位の継承をめぐる争ひと天皇と諸豪族との関係の歴史で、それはまた天皇とお妃たちとの恋愛事件として展開してゆくのである。そこにある歌謡はほとんどが愛情の歌で、その主要の部分は、天皇とお妃たちとの贈答の名歌である。その歌謡を記しと定めることによつて、『古事記』を書いた人々は、古代天皇の力強い率直な感情の表白を讃嘆したのであらう。記紀の歌謡の芸術的価値は『万葉集』にまさると言はれてゐる。その作者の大半は天皇である。つまり、天皇は、国民とともに歌を作るといふことが、『古事記』に記されたのである。しかも『古事記』は天皇を人そのものとして描いてゐる。『古事記』が、天皇の権威を高めるために造作されたといふ説は、天皇の恋愛をあからさまに描いてゐるといふ一事で反論することができよう。

(一) 『日本書紀』

『日本書紀』とは、言ふまでもなく『日本書』の「本紀」を示す書名であらう。中国史書の紀伝体の「紀」のみとしたのである。漢文で書いた点が『古事記』とは異なるが、神代卷上下二卷を巻頭に置いたところや、登場人物の歌謡を本紀の文章の中に点綴したところは、『古事記』にならつたものであるが、当代の文学者の偉大な見識である。歌謡を日本語のままに挿入することによつて、「紀伝体」の「伝」を省略したとも言へるのであつて、このやうな歌謡

と散文とをもつてする歴史の書き方が、日本の歴史の書き方に方向を与へたといふことができよう。さういふ意味で、『日本書紀』の作者たちにも日本固有の文化についての自覚があつたことは、わかるが、漢文で書いたために、いくつかの重大な問題を残すこととなつた。一つは紀年の問題であり、一つは、武烈天皇暴逆の記事である。

武烈天皇の暴逆の記事は、天皇の権威を失墜させようとする目的のもとに引用される記事であるが、中国史書にある残虐記事の引用のほひが濃い。中国の史書には、かういふ極端な残虐記事があるが、日本の史書には、後になつてもかういふ残虐記事はすくない。『日本書紀』が、漢文によつて文章を飾つた結果かういふ記事となつたものであらう。特に、中国の王朝交替の史観——聖帝からはじまつて暴逆の帝王に終る王朝革命史観の影響からのものであらうと思ふ。『古事記』とは全く異つてゐることからも、さういふ感じがするのである。日本古典文学大系本『日本書紀』の「補註」につきの通りにある説に賛成である。

「『割孕婦之腹』以下しきりに見える武烈天皇の暴逆を示す記事については、古くから、百済の末多王の乱行を記した百済記の記事が混入したのであらうとする内山真竜や落合直澄などの論があつた。これに対して津田左右吉は、尙書・呂氏春秋・史記、列女伝などに中国の暴君の桀王・紂王のこととして記されている辞句から造作したものとしている。仁徳天皇の系統が武烈天皇で絶えることから見ても、仁徳天皇を堯・舜のような聖帝として扱う一方、武烈天皇を国を滅した桀・紂のような暴君として記すという中国風のやり方が用いられたことも十分考えられる。」

『日本書紀』には、天皇の具体的な政治に対する批判はいろいろな形で記されてゐるので、古代天皇がすべて聖帝のやうな姿に書かれてゐるのではない。むしろ全体としてはありのままに書かれてゐると見られるものであるが、武烈天皇のところだけあまりひどい記事があり、しかもそれが中国の文献から採つたと思はれる語句に拠つてゐるので、

所見を附記したのである。

(三) 『万葉集』

『古事記』下巻が恋愛詩人として雄略天皇を描いたことは、雄略天皇の

こもよ、みこもち、ふぐしもよ、みふぐしもち、この丘に、菜摘ますこ、家聞かな、名のらさね。そらみつ、大和の国は、おしなべて 我こそ居れ、しきなべて 我こそをれ、我こそはのらめ 家をも名をも

といふ歌謡を『万葉集』巻一の巻頭に置いた『万葉集』の撰者の心にうけつがれてゐる。

明治・大正・昭和三代の歌人川出麻須美先生が、

「古人らはこの歌を御製として伝へ而も歌に脈うつさかんな情熱と強力な意志とを賛嘆して措かなかつたのであらう。開卷へき頭にこの御製を据ゑた理由は分らないが、少くも我々はこの御製を味はつて万葉の性格の一面を知らねばならぬ」(『万葉集講義』——川出麻須美遺稿集『天地四方』)

と書かれた言葉はこのことを言つたのである。雄略天皇は宋に遣使して有名な倭王武の上表文を送つた天皇としても知られてゐる。

『万葉集』の代表歌人柿本人麿が、

「天皇は神にしませば……」(巻三、巻頭)

「やすみしし 吾が大王の 聞き食す 天の下に 国はしも さにはあれども……」(巻一、吉野の宮に幸しし時、

柿本朝臣人麿呂の作れる歌)

「天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神分ち 分ちし時に
天照らす 日るめの尊 天をば 知らしめすと 芦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極 知らしめす 神の
命と 天雲の 八重かき別きて 神下り 坐せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛鳥の 浄の宮に 神ながら
太敷きまして 天皇の 敷きます国と 天の原 岩戸を開き 神上り 上りいましぬ わが大王 皇子の命の 天
の下 知らしめしせば……」(巻二、日並みし皇子の尊の殯の宮の時、柿本朝臣人麿呂の作れる歌一首)

と歌ふ時、この言葉にやどる彼の真実を疑ふわけにはゆくまい。彼は恋愛感情をうたふ切実さと同じ切実さをもつて、かうした天皇・皇太子の讃歌を歌ひ、同じ切実さをもつて哀悼の誠をささげたのである。彼が『古事記』と同じ信仰に生きてゐたことは否定しようもない事実である。天皇に対するこの忠誠心は人麿の思想の中核であつて、飾りものではない。

人麿につぐ山上憶良はどうか。彼はその「感情を反さしむる歌」の中に、

「天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大君います この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極 谷ぐくの
さ渡るきはみ 聞き食す 国のまほらぞ かにかくに ほしきまにまに しかにはあらじか」(巻五)

と歌つて天皇政治を謳歌したのである。彼は忠誠心にあふれた官僚であつた。「好去好來の歌」に言ふ。

「神代より 言ひ伝えてけらく そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言靈の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ
継がひけり 今の世も 人もことごと 目の前に 見たり知りたり」(巻五)と。

ここにも彼は、天皇統治の国がらと歌の道の盛んなる国との信仰を力強く歌ひあげてゐるではないか。これが彼の国

民意識であつたのである。この彼の信念と「貧窮問答歌」とは矛盾するものではない。むしろこの信念こそ「貧窮問答歌」に見られる時代思想批判の原動力であつたのである。「貧窮問答歌」をもつて彼に天皇制否定の革命家的氣質を予想するなど、とんだお笑ひぐさである。憶良は、人麿を継ぐ忠誠な歌人であり、国運を担つた責任感の強い官僚であつた。

大伴家持はこの二人の精神を継いだのである。

「海行かば 水づく屍 山ゆかば 草むすかばね 大君の へにこそ死なぬ 顧みはせじ」(巻十八、陸奥より金を

出せる詔書を賀ぐ歌一首)

は、大伴氏の言立として彼が『万葉集』に残した不滅のコトバである。「大君のみことかしこみ」「大君のまけのまにまに」とうたつた防人の数々の絶唱を残したのも兵部卿大伴家持であつた。防人の歌が、圧迫されて作らされたともいふ人は、どこがウソであるか、どこが作為であるかを指摘して、防人の歌を添削してみたらよい。世の物笑ひになるのがオチである。防人の歌の真実もまた疑ふことができないのである。

『万葉集』には、かうした忠誠感情を高唱した歌とともに天皇のおよみになつた数々の御歌が残されてゐる。それは今日でも愛唱されてゐるほどしらの高いお歌なのである。

またこの時代は、神武天皇・崇神天皇をハツクニシラススメラミコト(初国知らず天皇)と申上げ、御代御代の天皇を「○○○宮に天の下知らしめしすめらみこと」と申上げた時代である。天皇に対する敬語法も完成した。大臣をオホオミ、マヘツギミ、納言をモノマラスツカサと言つたのである。「君言臣承」「承詔必謹」(聖徳太子十七条憲法)の国がらが言語に定着したのもこの時代とみてよいであらう。

(四) 『古今和歌集』の序と賀歌

『古今和歌集』の和文序は日本最初の歌論・和歌の哲学である。その中に、「いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつつうたをたてまつらしめ給ふ。あるは花を恋ふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる心々をみたまひて、さかしをろかなりとしろしめしけむ。」

とある。このところを漢文(序)では、「君臣の情これに由つて見るべく、賢愚の性ここに於て相分る」と書いてある。和歌は政治と深いかかはりがあつて天子の行であると言ふのである。後に和歌を敷島の道と称するやうになる素地はここに見えてゐる。

その撰進については、

「今すべらぎの天の下しろしめすこと四つの時九ときのかへりになんなりぬる。あまねきおほむうつくしみの波、やしまのほかまで流れ、ひろきおはんめぐみのかげ、筑波山のふもとよりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろもろのことをすてたまはぬあまりに、いにしへのことをも、忘れしふるきことをもおこし給ふとて、いまもみそなはし、後の世にもつたはれとて、延喜五年卯月十八日、——(中略)紀貫之以下におほせられて)万葉集に入らぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめたまひて 云々」

とある。勅撰の経緯を感激を以て述べたのである。これが勅撰集のはじめである。

万葉集について、「かのおほん世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かのおほん時に、おほきみつのくらぬ、かきのもとの人まるなむ、うたのひじりなりける。これはきみも人も、身を合せたりといふなるべし。云々」と言つてゐる。「きみ(君・天皇)も人(人麿・臣民)も、身を合せたり」といふ言葉は、眞の歌人は忠臣であるといふ、重要な指摘である。

『古今集』の賀の歌の冒頭に、今日の国歌「君が代」の原型である天皇讚歌ともいふべき次の歌をかかげたのは、序文に見える感動と別のものではない。

わが君は千代に八千代にさざれいしのはほととなりて昔のむすまで(よみ人しらず)

「わが君」は『万葉集』であつたら、「大君」とか「天皇」とかの語が使はれたであらう。撰関時代は天皇の權威がそれだけ衰へたと言へよう。

(五) 『竹取物語』

『竹取物語』は月の精とでも言ふべきかぐや姫の物語である。『源氏物語』の中に、この物語を「物語の祖おや」と言つてゐる箇所がある。さういふ意味で広く読まれたのであらう。

当時の「いろいろのみ」(恋愛至上主義のロマンティスト)五人が、月から墮ちて人間となつたこの絶世の美女に恋をして、それぞれ命がけの試練をするが、結局みな脱落してしまふ。

そこで最後に時のみかど(帝)が登場する。みかどはあらゆる力がかぐや姫を地球上にとどめてお妃にしようとする

るが、現世的な力を超越する月の世界の不思議な力にはかなはない。

みかどがかぐや姫を連れてゆかうとして御輿を寄せなさると、かぐや姫は、「きと影になりぬ」とある。日の神のみ子のみかどは、この時かぐや姫が「ただ人にあらざりけり」——月の世界の人・宇宙人と覚さとるが、思慕の思ひをとどめることができない。

遂にかぐや姫の昇天の時が来る。月の世界からの使者を待たせて、かぐや姫はしづかにみかどに御手紙を書く。

——(現代語訳)

「このやうに多勢の人をくださつてお留めなさいませんが、許さない迎へがまいりまして、引き連れて行つてしまいますので、口惜しく悲しいことでございます。おそばにお仕へすることをいたしませんでしたのも、このやうに厄介な身でございますから、おわかりにならなかつたことでせうが、気づよくおことわりしてしまひましたことを、無礼なこととお思ひになられたと思ひますと、心のこりでございます。」

と書いて、

「いまはとて天の羽衣はごろもきるをりぞ君をあはれと思ひ出でぬる

という一首の歌を残した。天の羽衣を着てしまへば、この世の喜怒哀楽を失なつて、感情の無いつめたい宇宙人になつてしまふからである。この歌は、人としてのかぐや姫が愛を告白した唯一の歌で、それがみかどに対してであつたことは、人としてのうつくしさがみかどに認められたからにはかならないのである。

かぐや姫がこの手紙と一緒に残した不死の薬を、みかどは月にいちばん近い不二の山の頂に持つて行かせて焼いてしまふ。だからその山を「ふじの山」と名づけたのである。「その煙いまだ雲の中へたち昇るとぞいひ伝へたる」と

いふ一文が、その最後である。「竹取物語」は、ずい分多くのことを語つてゐる物語だと思ふが、この「物語の祖」の語るみかどは、かぐや姫と対になりうる最高のひとがらとして描かれたことがわかる。

(六) 『源氏物語』

『源氏物語』は光源氏といふ皇子を主人公にした長篇小説である。この中に、「桐壺帝」、「朱雀帝」、「冷泉帝」の三人の帝が描かれてゐる。(宇治十帖を別として)

第一巻は桐壺の巻で光源氏の出生を物語るものではあるが、桐壺の帝と桐壺の更衣との恋愛は、大臣派閥が後宮を通じてはげしい権力闘争する世界を背景にして、美しく悲しく描かれてゐる。桐壺帝のひたむきな愛情は悲しいばかりである。

光源氏は母を知らないさびしさから、母の面影を追ひ求めて、遂に父皇を裏切つて、母更衣によく似てゐるといふ藤壺の女御に通じて、冷泉帝の父となつてしまふ。これが源氏物語といふ悲劇の伏線であつて、そこにも作者の皇室観がうかがはれる。(と同時にギリシャ悲劇の『オイディプス王』の運命を思はしめる。)

そのことを知らないまま亡くなられた桐壺の帝が、須磨の浦に隠れて暴風雨のためののちも危ふくなつた源氏を助けに、亡霊となつて現はれるあたり、父親としての帝の真実を描いて涙ぐましい叙述である。

もともと須磨の暴風雨は、源氏が「犯せる罪のそれとなければ」とうたをよんだところから起るのである。

「海の面はうらうらと風ぎわたりて、行方も知らぬに、来しかた行くさき思しつづげられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

と宣ふに、俄かに風吹き出でて、空もかき昏れぬ。御蔽もしはてず、立ち騒ぎたり。」(明石の巻)

かうして、暴風雨、落雷と天災が源氏におそひかかるのである。源氏は経を誦し、願を立てて祈るが、雷雨は止まない。源氏の配所に落雷があり、津波さへ寄せかかる。この時、桐壺帝のみ霊が救ひにあらはれるのである。

「終日にいりもみつる風のさわぎに、(源氏)さこそいへいたう困じ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。

かたじけなき御座所なれば、ただ寄り居給へるに、故院(桐壺帝)のただおはしまし様ながら立ち給ひて、桐『など斯くあやしき所には物するぞ』

とて、源氏の御手を取りて引き立て給ふ。

桐『住吉の神の導きたまふままに、はや船出して、この浦を去りね』

と宣はす。いと嬉しくて

源『長き御影に別れ奉りしこなた、様々悲しき事のみ多く侍れば、今はこの渚に身をや捨て侍りなまし。』

と聞え給へば、

桐『いとあるまじき事。これは唯いささかなるものの報いなり。我は、位にありし時過つ事なかりしかど、おのづから犯ありければ、その罪を終ふる程いとまなくて、この世を願みざりつれど、いみじき憂ひに沈むを見るに、堪へ難くて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれどかかる序に内裏に奏すべきことあるによりなむ、急ぎ参りぬる。』

とて立ち給ひぬ。飽かず悲しくて、御供に参りなむと泣き入り給ひて、見上げ給へれば、人もなくて、月の顔のみ

きらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびきけり。」(明石の巻)
 「朱雀帝」は、大臣家の勢力争ひのために腹ちがひの弟である源氏を庇護することができないで苦惱されるが、その姿も当時の天皇の御苦しみであつたらう。作者は帝に対しては深い同情をもつて描いてゐる。

「その年、おほやけに、物のさとし頻りて、物騒しき事多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝(桐壺帝)、御前の御階の下にたたせ給ひて、御気色いと悪しうて、腕み聞えさせ給ふを、畏りて坐す。聞えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いと恐ろしう、いとほしと思して、后(弘徽殿)に聞えさせ給ひければ、

『雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしたる事はさぞ侍る。軽々しきやうに思し驚くまじき事。』

と聞え給ふ。腕み給ひしに見合せ給ふと見しけにや、御目煩ひ給ひて、堪へ難う悩み給ふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくせさせ給ふ。」(明石の巻)

また、源氏を実の父親と知つた「冷泉帝」の驚き、源氏に会つてそのことをたださうとなさるあたりの叙述も、父と知りながら父と呼べぬ帝の苦衷を描いて涙をさせよものがある。

「上(帝)も年頃御鏡にも思しよる事なれど、聞召しし事の後は、又細かに見奉りたまひつつ、まことにいとどあはれに思しめさるれば、いかでこの事をかすめ聞えばやと思せど、流石にはしたなくも思しぬべき事なれば、若き御心地につつましくて、ふとも打出で聞え給はぬ程は、ただ大方の事どもを、常より殊に懐かしう聞えさせ給ふ。うちかしこまり給へる様にて、いと御気色ことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見奉り給へど、いとかくさださだと聞召したらむとは思さざりけり。」(薄雲の巻)

源氏自身が左大臣家と右大臣家との権力闘争の間を浮き沈みしつつ生き抜く皇子である。その間に三人の帝たちはわき役として登場するが、人間の至情を貫かうとなさるゝのは、源氏よりもむしろこの三人の帝たちのやうに思はれる。さうしたお姿を描いた箇所は源氏物語の庄巻と思はれるほどである。

私はそこに作者紫式部の、帝のみこころを思ふあたたかい目を見る。紫式部は明らかに皇室びいきである。

(七) 『大鏡』

『大鏡』には、天皇の御治世について「世をたもたせたまふ」と言ひ、摂政関白について「世をしらせ給ふ」と言ひ、「一天下をまつりごちておはします」とも書いてゐる。奈良時代とは非常なちがひである。

また「昔も今も帝かしこしと申せど、臣下のあまたして傾け奉る時は、傾き給ふものなり」と言つて、藤原氏の摂関政治を諷刺し、道長を無上の人物とたたへてゐる。

さらに『大鏡』そのものが藤原道長中心の歴史物語であると作者自身は言つてゐるが、菅原道真の忠誠心を讃歎してその人がらに傾倒して書いてゐるあたりや、藤原兼家の謀略をすつば抜くあたりなど、どちらかと言へば、藤原氏の専制に批判的であると思ふ。

花山院の出家と退位とが藤原兼家の謀略によつて行はれたことは『大鏡』に活写されてゐる。高校の教科書などにも載つてゐるので事新しく説くまでもあるまい。

「自分もお供して一緒に出家します。」——さう言つて出家をすすめておきながら、帝の出家を見届けてから、「私

の変らぬ姿を父兼家二に一目見せてすぐ引返して来ます。」かう言つて逃げ帰つてしまつた(兼家の子の)道兼を、院は「われをば謀るなりけり」と言つて泣かれた、と書いてある。しかも花山院出家の寺のあたりには、白刃をちらつかせた武士たちが取り囲んでゐた、といふのである。

心から信じた友に裏切られた若い帝の、それからの彷徨と修行が一種の狂気に包まれてゐたからと言つて誰がとがめることができようか。それをあざわらひながら、己が一門の血を引く幼い帝を擁立した藤原氏のやり口を、『大鏡』の読者は、決して快く思はないだらう。さういふふうには書かれてゐる。

また道兼はこの故にあはれな生涯を送ることになる。そればかりではない、その長男は脳病で夭折し、次男も、父道兼が花山院を「すかしおろし奉つ」たことによつて、蔵人頭を「とられ給ひし」と書かれてゐる。かうして道兼の末が栄えなかつたと書く『大鏡』の筆は、明らかに花山天皇びいきである。

『大鏡』の中で、冷泉院と花山院とが、狂気に憑かれながら父子思ひあふお姿を描いた文章は、迫真の名文で、藤原氏の専横と対比して、当時の帝たちにあつて同情をさそふものがある。

「中にも冷泉院の、南の院におはしましたし時、焼亡ありし夜、御とぶらひにまゐらせ給へりし有様こそ、ふしぎにさぶらひしか。御親の院は御車にて二条町じりのつじに立たせ給へり。この院は御馬にていただきに鏡いれたるかさ、頭光に奉りて『いづこにかおはします、いづこにかおはします』と御てづから人毎に尋ね申させ給へば、そこそこなむときかせ給ひて、おはしまし所へ近くおりさせ給ひぬ。御馬の鞭かひなにいれて、御車の前に御袖うちあはせて、いみじうつきづきしうめさせ給へりしは、さる事やは侍りしとよ。それにまた冷泉院の御車のうちより、高やかに神楽をうたはせ給ひしは、さまざま興あることをも見きくかなとおぼえ候ひしに、明順のぬしの『庭火い

と猛なりや』と宣ひけるにこそ、万人えたはず笑ひ給ひにけれ。」

「さすがに遊ばしたる和歌は、いづれも人の口にのらぬなく、優にこそうけたまはれな。

こころみにほかの月をも見てしがな我宿がらのあはれなるかと

などはこの御ありさまに思召しよりける事とおほえ侍らず、心ぐるしうこそさぶらへ。

さてまた冷泉院にたかんな奉らせ給へるをりのは。

世の中にふるかひもなき竹の子は我がへむ年をたてまつるなり

御かへし。

年へつる竹のよはひをかへしてもこの世を長くなさむとぞ思ふ

かたじけなくおほせられたりと、御集に侍ることあはれにさぶらへ。まことにさる御心にもいはひ申さむと思しめ

しけむ悲しさよ。」(太政大臣伊尹の項)

六 『平家物語』

『平家物語』の主人公の一人平清盛は位人臣を極め、出家入道するが、焦熱地獄に墜ちる。平家一門の救はれるのは、建礼門院の悲劇的生涯とその供養とによるのである。あつつ死にしたといふ清盛の死を『平家』は豪快に活写するが、一方、清盛の圧迫を受けて小督との愛をも裂かれた高倉帝の崩御は深い同情をもつて書いてある。『平家』の作者が高倉帝に寄せた讃仰は国民の声でもあつたらう。平家巻六は、すべて高倉帝追慕にあてられてゐる。

「御年廿一。内には十戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を乱らせ給はず、礼儀を正しうせさせおはします。末代の賢王にておはしましければ、世の惜しみ奉る事、月日の光を失へるが如し。かやうに、人の願ひも叶はず、民の果報も拙き、ただ人間の境こそ悲しけれ。」

『平家』の登場人物はどれだけあるか知らないが、最高の讃辞であるともみてよい。

源平の争ひの渦中で、壇の浦に入水なさつた幼い安德帝の御最期を語る時、平家の語り手は涙なくして語れなかつたにちがひない。

「山鳩色の御衣にびんづら結せ給ひて、御涙におほれ、小さく美しき御手を合せて先づ東を伏し拜み、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西に向はせ給ひて、御念仏なりしかば、二位殿やがて抱き奉り、『浪の下にも都のさぶらふぞ』と慰さめ奉つて千尋の底へぞ入り給ふ。云々」(巻第十一)

とある。この幼い安德帝の御最期は、無垢の帝がその身を水中に投じて国内の争ひを止めようとなさるが如くである。作者は二度とかかる悲劇をあらせてはならぬと訴へるのである。

(あとがき。最近の天皇否定論の横行は寒心にたへない。せめて日本文学における天皇像について考へてみてほしい、さう思つて書いた文章である。『平家』でとめたのは、紙数の関係である。以下稿を改めて書きたいと思ふ。なほ本稿は、『浪曼』昭和四十九年七月号の拙論を大幅に改訂増補したものである。)